

奨励賞

さきしままる

柳瀬良行

世界自然遺産の島・屋久島は、深い森に覆われた島である。

江戸時代、島の人々はコメによる年貢に苦しんだ。島には水田に適した肥沃で平坦な土地が少なく、コメがとれなかったからである。

人々の苦しみを知った島出身の高僧・泊如竹が、それまで神域・禁伐とされていた森の利用を教えた。人々は森に分け入り、木を切るようになった。人々は、杉の木を縦に割り、薄く小さな板「平木」を切り出した。「ひらぎ」は脂分が多くて腐りにくく、屋根材として重宝された。コメに代わる年貢として納められるようになった。貨幣の代わりとしてコメの取引にも使われるようになった。

やがて里近い山々の杉を切り尽くしてしまった人々は、より大量で良質の平木を得るため、さらに山深く分け入った。そして人々はとうとう神がすむといわれる奥深い場所にまで入り、杉を切るようになった。その時から人々は理解し難い数々の怪異に遭遇することとなった。今から四百年前のことであった。

柳瀬良行は、屋久島最大の集落宮之浦にある屋久島環境文化財団に勤務していた。

日本野鳥の会の会員である良行の休日は、いつもバードウォッチングで

過ぎていた。

良行は世界遺産の島・屋久島での勤務を、野鳥を調査せよという「天の啓示」と考えていた。単身赴任の苦労もどこ吹く風であった。

休日のたびに官舎のある宮之浦集落とその周辺の森を散策しながら鳥を調べ、記録した。月に一、二回はひとりで島のあちこちに遠出して、いろいろな場所の鳥も楽しんでた。

人事異動の事務作業が終わり、新しい職員達も落ち着いた四月下旬の休日、良行は久しぶりに白谷の森を歩こうと決めた。五月の連休になると、良行の勤務する環境文化センターはお客様が増える。そうなると、総務課長という立場上休めなくなる。連休前の休館日を利用して、ゆっくり鳥を見に行くことにした。早ければ「キビタキ」という小鳥が渡ってくる頃であった。キビタキという鳥は良行のお気に入りであった。さわやかなよく通る声で鳴く美しくかわいい小鳥で、初夏に屋久島に渡ってくる鳥であった。ほの暗い照葉樹の森の中で見ると、身体が驚くほど鮮やかな黄色があたりを明るくするようにも思える。良行は、文字通り「一隅を照らす」鳥と考えていた。

朝食のあと、テレビの天気予報を見てから双眼鏡と図鑑に山用のザックを手にとると、車で官舎を出た。官舎の前の県道を白谷雲水峽へ向けて勢

いよく走り上がった。朝早いため他に車はいなかった。

白谷の森、特に白谷雲水峡は、人気の観光スポットで人出が多い。ゆくりと鳥を楽しむには騒がしい時もあった。良行は白谷雲水峡より少し下の森を鳥の観察地としていた。そこから森の中へ入り、白谷雲水峡を遠巻きに歩くことにしていた。林道に停めた車の中に予定コースを書いたメモを置いた。ザックを背負い靴ひもを結びなおし双眼鏡を首から下げると、森へ入った。

道路沿いの斜面を少し登ると、小さな溪流の横に出た。溪流の横をそのまま登ると、良行お気に入りの大きな岩があった。いつもこの岩の上に座り、風景を楽しみながら鳥を見た。午前中はこの岩に座っていることが多かった。登ってきた道や宮之浦の街はもちろん、隣の種子島やその周りに広がる海もよく見えた。

前の年の秋、この岩の上で本土から屋久島に渡ってきた冬鳥「ヒヨドリ」の数千羽の群れを見た。すさまじい数のヒヨドリが、黒い固まりとなって宮之浦川の河口から街の上空に次々と飛来した。群れはけたたましく鳴き交わしながら、白谷の森に消えていった。良行にも二度と経験できないであろうと思われるほど、ダイナミックな渡りだった。ヒヨドリ独特の賑やかでやかましい鳴き声がしばらく周りの森に響いていた。年末から今年の春にかけて、島の冬の農産物であるポンカンやタンカンなどのミカン類に、かなり大きな鳥害が出た。ヒヨドリがこれらの果物を食べてしまうのであった。このため、良行は地元農業団体から野鳥の生態についての講演を頼まれた。講演の時、このダイナミックな渡りについて語ると、農家の人々も目を輝かせて聞いてくれた。

雨の多い屋久島であったが、この日は早朝から不思議なほど天気がよく、岩の上で日光を浴びていると汗ばむほどであった。近くの木々の枝にはヤクザルの群れがいた。群れのいる枝の下には、サル達の食べ残しが落ちてくるのを目当てにヤクシカの家族もいた。どちらもはじめは良行を意識して時々見ていたが、危害を加える相手ではないと判断したらしく、まもなく、良行の存在は無視されるようになった。

森ではコジュケイやウグイスが鳴き、ツバメやメジロ、ヤマガラやコゲラなどの小鳥やトビやチョウゲンボウなどの猛禽類が頭上を飛んだ。

リュウキュウサンショウウイは、これでもかこれでもかと言うように何度も頭上を鳴きながら飛びまわった。しかしお目当てのキビタキは、声も姿も一向に確認できなかった。

森の時間はゆつたりと過ぎていた。昼近くキビタキを探しにもう少し奥へ入り、白谷雲水峡の近くに行こうと考えた。立ち上がって歩き出そうとした時、視線を感じて、あたりを見回した。胸騒ぎもした。急に立ち上がったせいだろうかと思った。森には慣れてるし、林道からさほど離れていないので不安はなかった。このまま鳥を探しながら歩けば、一時間も shouldn't うちに観光客の多い白谷雲水峡の吊り橋あたりまで近づく予定であった。

小さな溪流があった。溪流を越える時、良行は立ち止まり咳払いをした。島ではどんな小さな溪流にも神様が宿っていると言われていた。川や溪流を渡る時には、神様を驚かさないように咳払いをしたり石を叩いて音を出したりしなければならなかった。そうして神様の許しを得ると、そのあとの災難も防いでもらえるのだと聞いていた。溪流を渡った。

良行は鳥を見ながら、ゆつくりと歩いていく。しばらく歩いた時、視界の中を何かが横切ったように感じた。気のせいかと思った。しかし少し歩くと、また何かが視界の端で動いたように思えた。足元には、溪流の小さな岩が続いていた。その岩の間から何かが顔を出したように思えた。

良行は、イタチかもしれないと思った。白谷には、好奇心旺盛なイタチがいた。岩の間に隠れながらあとをつけてきては突然現れて登山者や観光客を驚かせた。良行も何度か出会っていた。離れた岩の上に、可愛い目で話しかけるかのように立っていたこともあった。イタチであれば、すぐに出てくると思った。良行は、周りを見回しながら、話しかけてみた。

「からかわないですよ。大丈夫だよ」

遠くでかすかに笑い声が聞こえた。観光客の声だと思い、意外と早く白谷雲水峡の近くに着いたと思った。しかし、それにしても、まだ周りは深い森の中であった。

溪流の奥を確認しようとした時、何かが岩の間から飛び上がり、驚いた。確かに何かが飛び上がったが、良く見えなかった。真っ直ぐ上に飛んだように見えた。鳥ではないと思った。見回すが、何も見えない。疲れたと思う、近くの岩に座った。

今度は同時に数箇所で見えたと見えた。大きくはないようであるが、はっきりしない。目をこすって見たが、焦点が合わないかのようにはっきりとして、確認できなかった。やがてその何かが少しずつ移動し始めたように思えた。思わず良行は追い始めた。

かん高い笑い声が聞こえた。笑い声に気がついた時、良行は見慣れない森の中にいた。気付くのが遅過ぎた。さつきまで追っていたものは、見えなくなっていた。そして、自分がどこにいるのかもわからなくなっていた。良行は、山岳ガイドから聞いた「あやかし」を思い出した。屋久島の深い山の中で、不思議な物が現れることがある。それは小さいがはっきりした形はない。人によつては、虫にも鳥にもあるいはネズミにも見える。森の妖精と言う人もいる。そしてこれを見た時は、すみやかにその場所を離れなくてはならない。そのまましていると恐ろしいことが起こるから、と。

良行は、屋久島の色々な怪異の話は聞いていた。どれも森で安全に暮らすための教訓を教える作り話と考え、笑いながら聞いていた。しかし、確かに何かを見た。

また笑い声が聞こえてきた。人の声やサルの声の聞き違えているのだと思いたかった。また思い出した。「山姫」であった。屋久島の山奥で出会うことがあると伝えられる女の妖怪である。言い伝えによれば、真っ黒い足まで届くほどの長い髪で、赤衣着物を着て、ぞっとするほど白く美しい横顔をしているという。山姫は必ず笑いかけてくる。その美しい笑顔に誘われて一緒に笑うと、精気を吸い取られる。笑いかけられたら、その魅力に負けていないことを示すため、にらみ返さなければならぬ。まさかと思いついて見回したが、女の姿はなかった。気にとめないようにと考えた。

その時、時計を見て驚いた。既に午後二時をまわっていた。急に空腹を覚え、今度は森林管理署の次長の話を思い出した。国有林の生き字引と言われたその人は、会議のあとの懇親会で言った。

「一番よく起こるのは道迷いだね。獣道を歩道と勘違いしてしまうからね。ちょっと道をそれただけなんだけれど、パニックになつてやたらと歩き回ってしまう。益々奥へ入つてしまふから危ないね」

そう言つて、道迷いへの対策を明確に言つた。「迷つたらその場に座り込む。動くな。まずは飯を食おう。何か腹に詰め

るんだ。したら冷静になる。バタバタしないで、ゆっくり周りを見回す。必ず手がかりがある。諦めちゃ駄目だ」

焼酎を片手に何気なく聞いた言葉だった。この時鮮やかによみがえった。思い出すことで、少し冷静になれたようにも思った。

「よしっ、飯でも食うぞ」

良行は、わざと大きな声を上げた。

ザックの中には、今朝作った赤ちゃんの頭ぐらいのおにぎりが入っていた。良行の鳥見の昼食は、いつもこの大きなおにぎりだった。梅干しと好物の卵焼きと漬物、そして冷蔵庫の余り物を詰めれば簡単に作れた。ポリウムも栄養も十分で、持ち運びにも便利だった。

良行は、山に入った時は、万に備え、食料の半分は残すようにしていた。今日は、念のため三分の一だけ食べた。それでもけっこうおなかいっぱいになった。おにぎりを食べると、確かに落ち着いてきた。

良行は、あらためてザックの中味を確認した。いつも山に入る時に持つ専用のザックであった。一番底に、雨具のポンチョが入っていた。携帯用トイレ、大きなビニールのゴミ袋とそれに入れて新聞紙一日分、ナイフ、ヘッドランプ、ラップで包んだ乾電池、ケースの中に塩と腹薬と傷薬、包帯にもなる日本手ぬぐい、風糸、ドライフルーツとサバ節のかけらを入れたドロップ缶、そして、黒砂糖アメの包み四個が入っていた。我ながら準備のよいことに苦笑したが、その準備が良行を落ち着かせた。しかし、いつも入れていたはずのコンパスが見当たらなかった。ザックから取り出した覚えはなかった。ちょっと考えてから全てを手際よく詰め直すと、アメ玉をしゃぶり始めた。携帯電話は圏外のまま、全く通じなかった。ペットボトルに入れた水は今のところ十分ある。何より屋久島では水に困ることはない。ボトルの水が空になったら、一面に広がる苔からしみだす水をなめればよい。

サルやシカが多く大腸菌だらけになっているかもしれない表流水はともかく、ゆっくりと時間をかけて木々の間から地中を流れ、苔の中から沁み出す水は、比較的安全なはずである。

良行に、周りを見回す余裕が出てきた。そして、気がついた。なぜか音がほとんどしていなかった。

屋久島の森は、にぎやかである。森を吹き過ぎる風は様々な音を作り出し、島中に鳴り響いた。時には人工的に聞こえる音もあった。神様がならず「天鼓」、あるいは神様がお通りになる時に聞こえる「神渡りのお囃子」などと言われる音もあった。良行自身、宮之浦の官舎で寝ていた真夜中にジェット機の轟音を聞いて飛び起きたことがあった。空港で聞くようなエンジン音が響き、ジェット旅客機が町の上空を低空で通過したと思ったほどであった。集落の自治会長に話すと、それは季節風などの強い風が木々を揺らした音で、島の反対側から風とともにどんだん大きくなって伝わってきて、瞬間的に町を通り抜けて海へ出ていく音だと聞いた。時にはそんな音までするほどにぎやかな森が、いまは静まりかえっていた。

見回していると、岩の表面の所々に、歩いた跡らしい緑の苔が取れた部分が見つかった。良行はこれを見れば戻れるかもしれないと考えた。人の足跡にも見えるその跡は、シカの足跡かも知れず、頼りにならない可能性は高かった。しかしこの時には、それにかけるしかないと思った。ゆつくり周囲を確認しながら歩き出した。なかなか進めなかった。苔が取れた岩が見当たらないのであった。本当にここを歩いてきたのだろうか、良行は不安になった。時間がいたずらに過ぎていった。

屋久島の森にはもうひとつの危険があった。闇の訪れが早いことである。高い山があることと深い森があることは、日の入りが平地よりも早いうえに樹木が太陽や月の光を遮るといってもあった。早ければ、午後四時頃には太陽が山の陰に入り、暗くなっていくおそれがあった。森から脱出することと同時に、夜への備えも考えなければならなかった。時計は既に四時を回っていた。足を止め、あたりを見回した。けっこう大きな岩があちこちにあった。このあたりで、ぬぐらにできそうな岩を探す事にした。

屋久島の森は、しばしば未踏の原生林のように言われるが、実際には相当以前から人が入り込んでいた。江戸時代には、豊富な杉が「平木」や「板木」に加工され、年貢として納められた。この時期には島中の優良な杉が全て切り尽くされたと言われるほどであったから、奥地の森でも、伐採のために大勢の人が泊まったり住んだりした跡が残っていた。ほとんどの大きな岩に利用されたと思われる跡が残され、今でも登山の休憩場所にされ

ていた。そのような場所は、「岩屋」と呼ばれ、名前のついているところもあった。

屋久杉の巨木にも、その様な跡があった。

縄文杉も裏に回れば広い空洞があり、その中はこれまでの焚き火の跡で黒焦げになっていた。良行自身、若いころ縄文杉の調査のためにこの空洞の中で雨宿りをし、火を焚き、食事をしたことがあった。

巨木や巨石を探しながら歩いた。森が暗くなり始める直前、目の前に大きな岩屋が現れた。明るいうちに周囲を確認できた。ふたつの大きな岩が重なり、雨が降りこまない形となっていた。しかも、岩肌には以前から使われていたと思われるススのような黒いものもついていた。時計を見ると、午後五時前となっていた。

あたりはかなり暗くなっていた。あるいは、もう少し歩けば、この森を出られるかもしれないとも考えた。しかし、楽観的な判断をすると、森を出られなくなるどころか岩屋すら見つけられなくなると考えた。森を脱出する事はあきらめた。明日の夜明けを待って動いた方が安全だ、そう判断した。

慎重に調べると、岩屋の奥は行き止まりになっていた。落ちている木の枝を集めると入り口をふさぐような形に組み、ザックから取り出した風糸で縛った。石でかまどを作ると、ちぎった新聞紙とあたりに散らばっていた杉の小枝で火を焚いた。暗くなった森はひんやりとし始めていたが、焚き火の火がつくと岩屋の中が明るく温かくなってきた。ヘッドランプはいらなかった。

良行は、多分これまでにたくさんの方がこの岩屋で夜を過ごしただろうと思った。丁度寝床になるくらい平坦な地面があり、横になれるようになっていた。あるいはかつて誰かがここで暮らして作ったのかもしれないとも思った。

おにぎりの残りやサバ節のかけらで食事をした。食べながら考えた。明日良行が出動しなければ、職場の皆がすぐに気付くだろう。官舎の駐車場から車が消えているから、帰宅していないと考えてくれるだろう。部下で官舎の管理人でもある脇元の奥さんが、スベアキーで部屋に入るに違いない。玄関には職場で約束しているとおり、行き先を書いたメモがある。

すぐに、遭難の可能性を考えてくれるだろう。良行が車を止めた場所まで、誰かが走ってくるに違いない。そして車に残したメモを見て遭難を確信するだろう。勤務時間は八時半からだから、遅くとも午前中には救助隊が出るだろう。半日、明日半日を生き延びようと決意した。半日なら食糧も装備も充分である。屋久島には熊などの危険な生き物はいない。念のため入り口には枝が渡してあるから、何かが来ても、すぐには入ってこれない。あのよくわからない怪しい物も、その後は全く現れなかった。

ほっとすると、疲れが出たのか、急に眠気を覚えた。何時間も歩き続けたのである。眠くなるのも当たり前だと思ひ、ウインドブレーカーのファスナーをしつかり締めた。ビニール袋に新聞紙を入れて簡単な枕を作ると、ポンチョにくるまり、横になった。けっこう暖かかった。焚き火は、チロチロと小さな炎を上げていた。すでに漆黒の闇が岩屋を包んでいた。

どのくらい眠ったのだろう。夢の中で笑い声を聞いたように思ひ、はっとして起きた。周りを見直した。火は消えていかなかった。時計を見ると真夜中であつた。

その時、岩屋の奥から少し生暖かい風が流れたように感じた。おかしいと思ひ、後ろを振り返り、岩屋の奥をヘッドランプで照らした。驚いて息を呑んだ。空洞があつた。夢を見ているのではないかと思ひ、周りの岩や自分の顔を触ってみたが、夢ではなかった。この岩屋に入るとき調べたにもかかわらず、奥に穴があいていた。見間違えたはずはない。あの時、確かにここは岩肌であり、空洞はなかった。

空洞から吹く風は意外と心地よく、その上なぜか懐かしく感じられた。すぐに道具をまとめた。不思議な感覚だつた。何かが穴の中に誘つていた。身体が、ひとりで動いた。空洞に入ることにした。

ヘッドランプをつけ、手には丈夫そうな木の枝を持った。思いついて、入り口の枝を結んでいた風糸を取り出した。風糸は数十メートルある。これを引きながら穴に入れば後から来る救助隊にその位置を知らせることができるだろう。糸が切れたら、引き返そうと考えた。風糸の感触が、この誘われている感覚を少し冷静にさせてくれるように思った。暖かいゆるやかな風は、依然として吹いていた。

空洞の中に入ると、驚いた。ヘッドランプの明かりの中で、天井が高く

ランプの光が届かないほど奥が深いことがわかつた。風糸を引きながら進んでいくと、道が緩やかに傾斜していることに気が付いた。このまま地の底まで行くのかも思ひ、進んでいくと、明かりの中に小さな白いゆらめきのような光が見えた。ランプを消した。かすかな光が揺れている。その光の奥に、洞窟の底らしい行き止まりがぼんやりと見えてきた。良行は立ち止まると、光の位置を確認し、自分を納得させるかのようにつぶやいた。

「人魂だ。リンが燃えている」

まだ風糸が残っていた。ランプをつけると、リンの燃えている方向を照らし、場所を確認した。

リンが燃えていた底らしい場所に着いた時、石の間に白い固まりを見つけた。思わず手が伸びた。骨の固まりだつた。良く見ると、あたりに白い小さな固まりと固まりが崩れたらしい白い盛り上がりがあつた。人骨だと思つた。しかし頭蓋骨のような大きな骨は見当たらなかった。朽ち果てたのかも思ひ、思つた。

良行が来たことで空気が動き、リンの人魂は消えた。固まりに向かい合掌した。ザックからビニール袋を取り出し、あたりに散らばる骨の塊らしいものを詰めた。詰め終わった時、良行は息苦しさを感じた。しまったと思つた。

「酸欠」

思わず声が出た。急いで引き返そうとした。その時であつた。ランプの明かりの中で、良行が降りてきた道とは反対側に緩やかに上がる傾斜が見えた。そして、傾斜の横の大きな岩の上に、何か白いものが立っていた。ランプの明かりの中に、髪の毛の長い女の横顔が見えた。

「ウ、フ、フ、フ、フ」

女の笑い声だつた。ゾツとするほど暗くこもつた笑い声だつた。ゆっくりと、良行に顔を向けようとしていた。つられて良行も笑いそうになつた。その時だつた。良行が降りて来た方向から声があつた。

「そっちじゃごあはんど。こっち、ごあんど」

ハッと我にかえつた良行は、その女の横顔をにらみつけた。女に背を向けると、良行は入り口の方へ上がり始めた。

「チエッ」

大きな舌打ちの様な音が後ろから響いた。良行は、後ろを振り向かず、必死でタコ糸をたぐり、入り口へ引き返した。岩屋の外から声が呼んでいた。「そっちじゃごあんど。こっち、ごあんど」

入り口に渡りあつた枝を蹴破ると、岩屋から飛び出した。焚き火の火は消えて、あたりは真っ暗であつた。

岩屋を出ると、息苦しさがなくなった。

ヘッドランプで照らされた岩の上に、また白いものが立った。

「こっち、ごあんど」

それは、人間の形をして、手招きをしているようだった。女だと思つたが、あの暗くこもつた笑い声ではなく、なぜか優しく暖かく、導くような声だった。良行はその声に導かれるようにして、森を歩いた。道に迷いそうになると、その声をして形が見えた。常に良行の前に立っていた。

「そっちじゃごあんど。こっち、ごあんど」

どれだけ歩いたかわからなかつた。突然溪流に足が落ち、冷たい水で我にかへつた。溪流の横にある崖の上に立っていた。水の流れ落ちる激しい音が、良行を目覚めさせた。最初に渡つた溪流だった。森を出たことを知つた。良行はそこに座り込んだ。

月があたりの山々と森をこうこうと照らしていた。目がなれると、谷間に小さな明かりが見えた。真っ直ぐに並んで見えるオレンジ色の灯りであつた。見慣れた灯りであつた。集落の真ん中を流れる宮之浦川沿いの街灯であつた。良行は、宮之浦へおりの林道の上に出たことを知つた。

助かつた。そう思つて良行が森を振り返ろうとした時、何か空気がかたまりのようなもので、上から身体を押さえつけられるように感じた。重みに逆らい、空を見上げると、頭のすぐ上に大きな帆掛け舟のような形の黒い雲が浮かんでいた。それはゆっくりと上に動いていたが、月に照らされているにもかかわらず真つ黒だった。その形に、思わず声が出た。

「さきしままる」

良行は、お盆の夏祭りの時、宮之浦川で流し舟をしている自治会長から聞いたことを思い出した。屋久島の人、亡くなると船に乗って海に向かうにある死者の世界に行く。その時に乗る船の名前が「先島丸」である。

お供え物をのせた小さな流し舟の帆には、「先島丸」と書いてあつた。黒い固まりは、高くあがると、今度は流れていく雲とは反対に海に向かって静かに進んでいった。月の光がその姿を照らした。

やがて、黒い固まりはゆっくりと海の上に消えた。あたりがだんだん明るくなり、夜が明けた。

海に囲まれた屋久島の夜明けは早い。良行は自分のいる場所を確認した。白谷雲水峽へ上がる林道の崖の上にあった。崖を迂回し、アスファルトの道路におりた。アスファルトの上に立つと、その硬さに、生きている実感が湧いてきた。良行は、その硬さを踏みしめるように、車を置いた場所へと歩き始めた。

しばらく歩くと、車の音がした。林道のカーブから白い軽自動車が見えた。急ブレーキをかけて車が止まると、窓から娘が顔を出した。

「こんな時間にどうしたんですか」

不審に思つたのか、娘はそう声をかけてから窓を少し閉めた。良行は、娘に、財団の職員であること、道に迷い一晩を過ごしたこと、不思議な体験をしたことを話した。

それを聞いた娘はびっくりした。娘はすぐに良行を車に乗せると、一緒に白谷に水を汲みに行つて欲しいと言つた。そして、良行にそのわけを話した。

娘の祖母が、この早朝に亡くなつた。亡くなる前、祖母はしきりに白谷の湧き水を飲みたがつた。そして、亡くなる直前、突然誰かを手招きするような動作をして何回も叫んだ。

「そっちじゃごあんど。こっち、ごあんど」

娘は、話を続けた。

娘の祖父、亡くなつた祖母の夫であつた日高健三は、営林署の伐採人夫であつた。健三は数え四十二歳の夏、白谷の森での伐採作業に行つたまま行方不明となつた。営林署や集落の人々による懸命の捜索が行われたが、遺体は見つからなかつた。「神隠し」にあつたと噂された。

捜索が打ち切られたとき、祖母は半狂乱となり、自ら祖父を探しに行こうとまでした。しかし、当時の白谷は今よりはるかに深い森が広がり、作業現場は荒れて危険だつた。しかも、女性の入山はタブーとされていた。



柳瀬良行

やなせ よしゆき

本名 柳田一郎

1954年 鹿児島県日置郡日吉町（現日置市）生まれ

77 熊本大学法学部法学科卒業
鹿児島県庁入庁2000～03 財団法人屋久島環境文化財団
に派遣07～ 財団法人鹿児島県文化振興財
団に派遣中

（現職／霧島国際音楽ホール総務課長）

明治時代の伐採現場で相次いだ作業員家族の事故死を教訓に、女性や子供の事故を防ぐために作られたタブーでもあった。

祖母は、夫の遺体に対面する事はできなかった。しかし、祖母は夫への思いを持ち続け、毎朝晩欠かさず白谷の森に手を合わせ、残された子らを育て上げた。

祖母の死を見取った家族は、皆涙ながらに考えた。きっと祖母の魂は白谷の森に行って、祖父を見つけたのだ。あの声は、やっと見つけた祖父を祖母が呼んでいるところだったのだ。だからあんなにも嬉しそうな満ち足りた笑顔で死んだのだ。

良行は、自分を導いてくれた声思い出した。あの声は、魂となった妻が、深い森の中で長い間会えなかった夫を探し当て導いていく、やさしく満ち足りた声だったのだ。

急いでザックを開いた。袋の中から、骨のかけらが消えていた。良行は、袋に入れた骨は日高健三の骨であったと思った。夫は妻を待ち続け、妻は夫を探し続けていた。頭上に現れたあの黒い船こそ、長い時間を経てやっと出会えた二人が、手に手を取って乗った「先島丸」であったと思った。

良行は娘と一緒に白谷の湧き水を汲んだ。汲み終わった二人は、白谷の深い森に手を合わせた。

花月の宴

原石 寛

人間の愛情とは本来エゴイステイックなものであり、決して暖かいものでも優しいものでもなく、生への厳しい凝視の働である——男女の愛と非情の相克を描く原石文学の華

原石文学の結晶がここにある！

近代文藝社
1500円